

ここに訳出したのは、現代クルド文学のバイオニアでトルコ出身のクルド人作家、メフメッド・ウズン (Mehmed Uzun 一九五三-二〇〇七) がトルコ語で著したエッセイ集『ぎくろの花』*Nar Çiçekleri*, 二〇〇〇年) の表題作である。

ウズンは一九五三年トルコ南東部、すなわちクルディスタンはスイヴェレツキ (Siverek) に生まれた。一九七七年よりスウェーデンに居を移し、作家としてのキャリアを積むこととなる。その後、トルコ国籍を剥奪され、一九九二年までトルコへ入国することができなかったが、二〇〇六年に胃がんが見つかり、愛してやまないディヤルバクルの地での治療を望み、トルコへ帰国した。

ウズンは母語であるクルド語の他に、トルコ語、スウェーデン語でも著述活動を行い、小説八作を含む十九作の著書を残し、二〇〇七年十月、ディヤルバクルで五十四年の生涯に幕を閉じた。

ウズンは、自身の著述活動にとって最も不利な言語であるにも関わらず、小説だけ

は必ず母語であるクルド語で書いた。母語なのに不利なのは、母語との蜜月期が七歳のときに強制終了させられているからだ。小学校に上がったその日に、教師の平手打ちとともに母語であるクルド語は禁じられ、それまで話したこともなかったトルコ語が彼にとっての教育言語・文化言語となった。よって、小説を除く文章はトルコ語で書くことが多い。本エッセイでも授業で退屈しきっている様子が描かれているが、理解できないことは聞かされ続ける授業など、さぞかし苦痛な時間だったことだろう。

インタビュー記事をまとめた『灰から生まれる言語と小説』(Killerinden doğan dil ve roman, 二〇〇五年) の中でウズンは、スウェーデン語やトルコ語といった一国の公用語になっている言語を選ぶこともできたのに、なぜ小説を書くにあたってクルド語を選んだのか、という、おそらく生涯で数えきれないほど聞かれたであろう質問に答えて、次のように語っている。

トルコ語あるいはスウェーデン語を選んでいたら、もちろんもっと簡単だったでしょう。クルド語を選んだのにはいくつかの理由があります。一番重要な理由

のひとつは、クルド語が私の母語であり、禁じられた言語であるということです。母語に対する倫理的な責任というものがあります。私は一知識人として、この倫理的な責任というものを非常に強く感じていました。俎上に載せられているのは、禁じられ、ありとあらゆる手段によって否定されてきた言語なのです。

言語を守ることに、可能であればその言語を発展させること、近代的な芸術である小説なるものに相応しい近代的な言語を創造することは、とても重要なことなのです。私がクルド語を選択した理由のうちの、最も重要なものはこれです。

もうひとつの大きな理由は、クルド語が私の幼少時代の言語であるということ。私は七歳になるまでトルコ語を話しませんでした。トルコ語との出会いは、小学校に入ったときにさかのぼります。その時まで、私の人生にあったのはずっとクルド語でした。クルド語の音/声とともに生まれ、そして育ちました。私の幼少時代の音を形成する言語で作家としてやっていく、ということに大変魅力を感じ、意欲をかきたてられました。また、別の理由もあります。クルド語で書くこ

とで、独自のな作品を生み出すことができると、独創的でないかと考えたのです。トルコ語がスウェーデン語で書いたとしましょう。クルド語で書くほどに独創的な作品を創造することはかなわなかったのではないかと思うのです。」(『灰から生まれる言語と小説』二〇―二二頁)

刑務所内で出会ったクルド人ジャーナリストのムーサ・アンテルを教師として、十八歳にして再びクルド語を習い覚え作家を志したウズンだが、トルコ語で書く作家であれば当然のように持っているあらゆるもの、まずもって成熟した文学言語、そして大学、図書館、協会、書籍、読者に至るまで、彼は何一つ持っていなかった。それでも、クルド語の音/声で独創的な作品を書くという可能性にかけた。

母語を禁じられ、クルド人であることが蔑みの言葉と同義となり、虫けらのように扱われているクルド人にとって、クルド語で書かれた小説を読むという経験は、民族の誇りを取り戻す行為に他ならない。ウズンの挑戦に読者は応え、ウズンはクルド人読者から絶大な支持を受ける作家となった。トルコは長らく先住民族であるクルド人

の存在を認めず、「山岳トルコ人」などと呼んで、その存在を否定してきた。民族自体が存在しないのだから、クルド語も存在しない(ことになっていった)。話すことも読むことも禁じられた言語は、死を宣告されたも同然である。民族は言語によって存在する。故に、母語の死は民族の死を意味する。書くことが、民族の存亡と直結しているのである。

とはいっても、言語を守っていく行為は、書くことだけに限らない。クルディスタンには語りの伝統を担う「デングベジュ(Dengbej)」と呼ばれる吟遊詩人が存在する。ウズンによれば五千年の伝統がデングベジュによって語り継がれてきたのだという。

ウズンやウズンが敬愛してやまないトルコを代表する文豪ヤシャル・ケマルらは、このデングベジュの伝統を小説に反映させている小説家だと言われている。死の宣告を受けた言葉に伝統の息吹を吹き込み、未来に続くクルド語を紡ぐこと。これが、小説家メフメッド・ウズンの生涯の仕事だった。

「ざくろの花」は小説家であるウズンが

✎

書いたエッセイである。アルメニア人とウズンの人生が交差する物語が主軸となり、アルメニア人大虐殺の考察を通じて他者に対する不寛容が招いた暴力と悲劇について言及されている。

また、作家ウズンのごく短い自伝としても読むことができる。ごく短い描写ながら少年時代の日々を描写するざくろの実や花についての鮮やかな色彩に導かれ、読者は北クルディスタンの中心地、ディヤルバクルへと誘われる。そして、私たちはその地でヴァルドおじさんの涙と遭遇するのである。

十九世紀後半から二十世紀前半まで、オスマン帝国領内のアルメニア人が組織的に虐殺され、強制移住を強いられる、という悲惨な事件が相次いだ。特に、一九一五年四月二四日にイスタンブルでアルメニア人活動家が多数殺されると、ここからアルメニア人への虐殺行為が始まったと言われる。しかし今に至ってもトルコ共和国では、「アルメニア人大虐殺などなかった」とする歴史修正主義の言説が存在する。ウズンが本エッセイでも他のところでも再三繰り返すように、他者を同化、排除、差別する思考が根深いトルコにあって、アルメニア

人として生きることの困難、そして故郷と家を失うことの悲しみを語るものとして、ヴァルドおじさんの涙以上に雄弁なものはない。

ウズンの筆は、不意打ちのように流される涙の理由を執拗に追いかける。「ぎくろの花」というエッセイは、ヴァルドおじさんの涙に導かれて書かれた文章だが、アルメニア人の虐殺に関して加害者でもあるクルド人として、虐殺と強制移住の事実を掘り起こし、その歴史を伝えていく責務を感じてもいるのだろう。

私はヴァルドおじさんの涙の背景や、トルコ在住時に遭遇したヴァルドおじさんの涙に酷似した少数民族の涙の理由を知りたくて、関連書籍を読んだり映画を見たりして情報を集めた。私のそのような態度に対し、周囲のトルコ人は決してよい顔をしなかつたばかりか、あからさまに「そこに書いていることは全部嘘だ」と軽蔑してみせたり、「虐殺の事実など聞いたことがない」などと攻撃的な態度で挑んできたりした。これが、ウズンが歴史的経緯を叙述しながら、悲しみと共に語る他者への不寛容というものなのか。いや、私のこの小さな経験などたるにたらないものだろう。それに、

私は罵られても、怒りをぶつけられても、身の危険を感じることはない。トルコの少数民族としてありとあらゆる辛酸を舐めたウズンは、この種の不寛容をどれだけ身を持って経験したことだろう。もはや、トルコでは生きていけないと思うほどに。

二〇〇七年一月、イスタンブルで発行されているアルメニア語・トルコ語新聞「アゴス」の編集長フラント・ディンクが、編集部の前でナシヨナリストの若い男に銃撃を受け殺されるといふ、衝撃的な事件が起きた。

今現在もアルメニア人ディアスポラの子孫の中にはトルコ人を恐れ、トルコへ行くことを恐れている人が多くいるという。成人した孫の代の人々は、祖父母から語り継がれてきた苦渋と痛みの記憶を、今も持ち続けているのである。

イスタンブルのど真ん中で、白昼堂々アルメニア人が殺されるのだから、その恐怖は杞憂ではない。一九一五年からおよそ一世紀を経たトルコで、相変わらずの「不寛容」という名の怪物が生き続けている。

「アルメニア人の次はクルド人だ」と言わんばかりに、トルコは他者に対する迫害の手を未だ休めることはない。母語を奪わ

れ、二級市民として蔑まれ、日々の迫害や暴力、投獄や拷問の恐れのある「祖国」(一)を逃れたクルド人もまた、ヨーロッパ諸国を中心にディアスポラとして生きている。ウズンもそのひとりだった。

先に引用したインタビュー集、『灰から生まれる言語と小説』でウズンは、「あまりにも多くの痛みがある」、「私は、書いているときですら大きな痛みを感じているのです」と語っている。(『灰から生まれる言語と小説』七五頁)

代表作『愛のような光 死のような闇』(Aşk gibi aydınlık Ölümler gibi karanlık 一九九八年)は、実に重苦しく、心が晴れる箇所ほとんどない小説だった。小説の舞台はトルコを模したような国。主人公は出生の秘密を背負った中年の軍人と、文学を学ぶ若き少数民族の女性。二人の運命が交差し、共に国によって銃殺されるまでを描いた作品である。

ウズンには愛や希望や人間の幸福というものについて書くことなどできなかつた。古い痛みが癒される間もなく、新たな痛みが襲ってくる。それが、クルディスタンという場所である。ウズンの作品に通奏低音のように流れる悲哀の源泉は、クルディス

タンの地で流され続けてきた、あまりにも多くの血と涙である。

98

ウズンはエッセイの中でサヤト・ノヴァの生地をシリアの主要都市の一つであるアレppoとしているが、実際の生地はグルジアの首都であるトビリシ(あるいはティフリス)だと思われる。アレppoで生まれた可能性があるのは、サヤト・ノヴァの父親のほうであるようだ。

二〇一二年の現在、そのアレppoは激しい戦闘と虐殺の地と化した。「怪物の種を懐に抱え込んだ悪しき伝統や偏見は、法や法的秩序よりずっと強力で長生き」だと断言するウズンの主張は、悲しいかな二〇一二年のアレppoでは一〇〇%正しい。しかしだからこそ、「サヤト・ノヴァや彼と同類である社会の良心、人類の良心たる作家たちによる諸作品における人間的なメッセージ」が重視されるべきであり、広く読まれるべきである。なぜなら、物語は人の記憶にとどまり続けるから。

一九三七年から一九三九年、トルコ東部のデルスィムの地で、クルド人の中でもザザ語を話すアレヴィー教徒(イスラームの一

派とされるが、教義が大きくことなるため異端視されている。トルコではスンニー派に次いで信者が多い)が虐殺され、多くの住民が強制移住させられるという事件があった。トルコの人々なら、「デルスィム」あるいは現在のトルコ語化された「トゥンジェリ」と言えば、一九三八年を中心とした虐殺の歴史を想起せずにはいられないはずだ。そして、多かれ少なかれ、様々な形で(被害者、加害者、傍観者、そしてその子孫たち)誰もがデルスィムにまつわる何らかの物語を持っている。

作家のムラトハン・ムンガンは、二三人の若手作家たちに、そんな誰しも持っているはずの「私のデルスィム物語」を紡ぐよう要請し、これを一冊の本にまとめた。ムンガンは前書きで、次のように書いている。

歴史書や研究書、関係書類や調査内容をまとめた文書は読者の興味をそそらないこともあるし、場合によっては積極的に避けて通る読者もいるだろう、また、読んでもあつという間に忘れ去られてしまうこともある。しかし物語は違う。物語は留まり続ける。思い出、状況、ことば、様々な舞台、登場人物は残り続ける。

このアンソロジーの目的も、歴史を文学によって更新することにある。そして、その手から人生を奪われた人々に、再び返すこと。

『あるデルスィムの物語』 Bir Dersim

Hikayesi, 二〇一二年、一二頁)

私たち人間がどんなに重症の記憶喪失患者であるとしても、一度誰かの記憶に刻みこまれた物語は、いずれ誰かに語られ、書かれ、翻訳され、また誰かに読まれ、書けるのちにまた、小さな居場所を見つけてだろう。そして、幾度となく、ことあるごとに、自らの存在を思い出させるのだ。

今回、トルコ語が原語であるウズンのエッセイを翻訳させていただく機会をいただいたが、クルド語で書かれた小説のほうも、誰かの記憶に刻み込まれた物語として、いざれ邦訳される機会があるかもしれない。その際は、強い決意でクルド語を選択し、たゆまぬ努力によってクルド語ルネッサンスをもたらしただ作家の小説だからこそ、原語であるクルド語からの翻訳を、と願ってやまない。